

令和5年産 コメ通信

第3号（令和5年5月12日）

【発行】

北秋田地域振興局農林部農業振興普及課
（電話：0186-62-1835）

田植え後の適切な水管理で初期生育の確保を！

1 気象と生育・作業状況

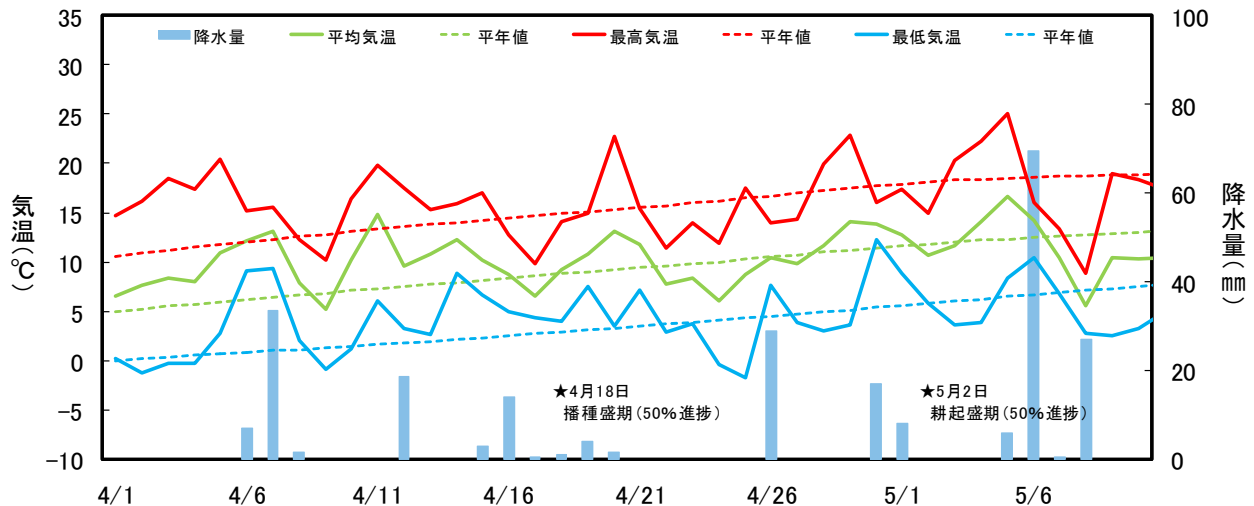


図1 気温と降水量の経過（アメダスポイント：鷹巣）

- 4月1半旬から5月1半旬にかけての気温は平年よりも高く、一部のハウスでは葉先焼けの症状が見られました。一方、風が強かった影響でハウス内の温度が上がりにくくなったため、病気の発生は少なかったとみられます。
- 耕起作業は順調に進み、盛期は平年より1日早い5月2日となりました。
- 向こう1か月（5月13日～6月12日）の気温は高く、降水量及び日照時間はほぼ平年並の予報となっています。（仙台管区气象台：令和5年5月11日発表）。

2 田植えとその後の管理

【田植えから活着まで】

- 田植えは、日平均気温14℃以上で、できれば最高気温20℃以上の温暖な日に行います。低温時や強風下で田植えをすると植え傷みが大きくなり、活着不良や初期生育の遅れにつながるため、悪天候下での無理な田植えは避けてください。
- 田植え後の苗は、通常4～5日で活着します。活着を促進するため、水深4cm程度の湛水状態を保ち保温効果を高めます。

【活着後の水管理】

- 活着後、分げつの発生を促進するには、水温の日較差を大きくすることが重要です。水温の日較差を大きくするため、かん水サイクルは「朝に水を入れる→日中は止水（水温上昇）」で行います。なお、日中のかん水は、水温が低下するため行わないようにします。

【雑草防除】

- 雑草の草種および発生量に応じた除草剤の選択と的確な使用により、雑草の防除効果が高まります。必ず適期に散布してください。
- 一発処理除草剤を単用する場合は、**代かきから10日後までを目安に散布**します。ノビエは代かき後14日前後で、ホタルイは代かき後10日前後でそれぞれ2葉期に達するため(農業振興普及課調べ)、散布が遅れないよう注意します。
- 除草剤散布後7日間は止水とし、排水路への落水やかけ流しはしません。田面が露出すると効果が低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりとかん水します。
- 周辺の水系など環境への影響に配慮し、移植前の初期剤の使用は避けてください。

3 本田におけるいもち病防除対策

【薬剤による葉いもち防除（移植水稻）】

- 葉いもち防除剤は、箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤のいずれかを使用します。

種類	薬剤名（農薬成分回数）	使用時期等	使用量
箱施用剤	ブイゲット箱粒剤 ※1 (1)	緑化期～移植当日	50 g/箱
	デジタルコラトップ箱粒剤 ※2 (1)	移植3日前～移植当日	100倍(500 mL)/箱
	ルーチンフロアブル (1)		25～50 g/箱
	Dr.オリゼ箱粒剤 ※1 ※2 (1)		50 g/箱
	ブーン箱粒剤 ※2 (1)	床土混和又は播種時（覆土前）～移植当日	25～50 g/箱
	ルーチン粒剤 ※2 (1)		50 g/箱
	アブライ箱粒剤 (1)	床土混和又は播種時（覆土前）	25～50 g/箱
側条施用剤	ファーストオリゼ箱粒剤 ※1 (1)	ペースト肥料用	250 g/10 a
	オリゼメート顆粒水和剤 (1)		100 g/10 a
	ツインターボ顆粒水和剤 (2)		20～50 kg/10 a
	コープガードD12 (1)	粒状肥料	40～50 kg/10 a
	コープガードW12 (2)		
	コープガードD-発664 (1)	移植時	1 kg/10 a
	オリゼメート粒剤20 (1)		
	スタウトダントツ箱粒剤 (2)		
	スタウトバディート箱粒剤 (2)		
	デジタルミネクト箱粒剤 (2)		
	箱大臣粒剤 (3)		
	ブーンバディート箱粒剤 (2)		
	Dr.オリゼバディート粒剤 (2)		
	Dr.オリゼフェルテラ粒剤 (2)		
	Dr.オリゼリディア粒剤 (2)		
	オリゼメート粒剤 (1)	6月15日頃(6/12～18)	2 kg/10 a
	ルーチン粒剤 (1)		1 kg/10 a

※1：プリンス剤との混合剤の使用量は25～50 g/箱、他の殺虫剤との混合剤は50 g/箱です。

※2：高密度に播種する場合は、本剤の使用量が1 kg/10aまでとなるよう、10a当たりの育苗箱数に応じて、育苗箱1箱当たりの薬量を50～100gの範囲で調節します。

【注意事項】

- 殺虫剤との混合剤については、剤により使用時期が異なるため注意してください。
- 箱施用剤の25 g処理は、使用箱数が20枚/10 a以上の場合とします。
- 高密度播種は育苗箱(30×60×3 cm、使用土壌約5 L)1箱当たりに乾籾として200～300 g程度播種する場合とし、薬剤の処理時期は移植3日前～移植当日とします。
- 水稻育苗終了後のハウスに野菜類を作付けする予定があり、箱施用剤を移植前～当日に使用する場合は、育苗ハウスの外で薬剤を使用してください。
- 農薬使用にあたっては、ラベルをよく読み、使用基準を確認してください。

【耕種的防除】

- ほ場に放置された補植用の余り苗は、葉いもちの強力な伝染源になる**ため、補植が終了したら、水田の泥の中に埋めるなどして完全に処分してください。
- 雪に覆われず乾燥状態で越冬した稲わらや籾殻は、葉いもちの伝染源となるので、ほ場周辺に放置しないでください。

問い合わせはJ Aまたは農業振興普及課まで ～次回発行は6月中旬頃～